

東北地方におけるアブラナ科在来種の調査・収集

石田 正彦¹⁾・千葉 一美¹⁾・熊谷 憲治²⁾・高畑 義人³⁾

1) 東北農業試験場・作物開発部・資源作物育種研究室

2) 青森県畑作園芸試験場

3) 岩手大学農学部

Exploration for Cruciferae germplasm in Tohoku Region

Masahiko ISHIDA¹⁾, Ichimi CHIBA¹⁾, Kenji KUMAGAI²⁾ and Yoshihito TAKAHATA³⁾

1) *Laboratory of Industrial Crop Breeding, Tohoku National Agricultural Experiment Station, Higashi-aniwa, Morioka, Iwate 020-0824, Japan*

2) *Aomori Field Crops and Horticultural Experiment Station, Rokunohe, Aomori 033-0071, Japan*

3) *Faculty of Agriculture, Iwate University, Morioka, Iwate 020-8550, Japan*

Summary

The exploration are collecting Cruciferae germplasm was carried out at 20 locations in Aomori, Akita, Iwate, Yamagata and Fukushima prefectures of the Tohoku region between 1998-1999 (Fig. 1). A total of 35 samples consisted 1 of rapeseed (*Brassica napus*), 1 of vegetable rapeseed (*B. napus*), 8 of rutabaga (*B. napus*), 12 of turnip (*B. rapa*), 3 of Chinese mustard (*B. rapa*), 3 of mustard (*B. juncea*), 4 of radish (*Raphanus sativus*) and 3 of wild radish (*R. sativus*) were collected (Table 1).

Landraces of rutabaga has been used well as a vegetable and forage in Kitakami mountain range until about 15 years ago. However, today it is hardly cultivated. As these rutabaga landraces of Tohoku is first collection in NIAR Gene bank, we think that it is necessary to carry out the further exploration and collection of it without delay.

KEYWORDS: Cruciferae, germplasm, collection, cultivars, Tohoku

1. 目的

青森県から岩手県に至る北上山系一帯には‘仙台かぶ’や‘砂糖かぶ’と称されるルタバガ (*Brassica napus*) の在来種が古くから存在し、飢饉時の救荒食のほか、増量材 (かて飯) や甘味食材として、また飼料用として盛んに利用されてきた¹⁾。ルタバガは耐寒性や貯蔵性に優れ⁶⁾、根こぶ病抵抗性を

保有する系統も存在することから³⁾、寒冷地の冬季の野菜としての利用のほか、同じナプス種の油糧用や野菜用ナタネの育種素材としても有望と考えられる。東北地方には独特なカブ・ナタネ（つげな類）の食文化が存在し^{2, 4)}、様々な特性を有する地方品種や在来種が分布していることから、これまでに数多くの品種系統が調査収集されてきた^{5, 7, 8)}。しかし、北上山系で栽培されているルタバガ在来種については、育種素材としての評価はもとより組織的な収集も実施されておらず、農林水産省のジーンバンクには1点も保存されていない。そこで、ルタバガ在来種の調査収集を主目的に、東北地方におけるアブラナ科遺伝資源の収集を実施した。

2. 方法

遺伝資源の探索・収集はTable 1に示したとおり、6回に分けて実施した。事前に各県の試験場や普及センター、マスコミ等に情報提供を求め、収集にあたった。ルタバガ在来種については情報量が極めて少なく、その探索には困難を極めたため、地域の直売センターや農業祭等で栽培農家の情報収集を行った。探索・収集にあたっては、東北農業試験場・業務第1科の伊東健二技官、藤澤敏彦技官、中嶋浩之技官および齋藤文隆技官の協力を得た。

種子以外の栄養体で収集したものについてはポット栽培し、隔離条件下で集団採種を行った。なお、本文中（ ）内の数字は収集地点No.を示し、Table 1およびFig. 1のNo.に対応する。

3. 収集の経過と結果

1) 秋田県大潟村（5月18日－19日）

大潟村（1：収集地点No.を示す。以下同じ。）ではイベント広場や道路脇緑地帯の計18haに景観用としてナタネ（*B. napus*）を栽培している。このナタネ畑内でみられる自生カブを調査した。現地では‘野良ナタネ’と呼んでおり、以前はみられなかったものが、ここ数年間でナタネ畑の広範囲に広がったとのことであった。調査の結果、根の肥大部は繊維質で硬く、横しわが入り、側根が多いことから、原始型の洋種カブと推察された。開花時期であったことから、草型が明らかに異なる2種類について、村役場に採種を依頼した。

2) 青森県下（6月24日－26日）

6月24日は六戸町（2）で‘赤長水かぶ’と呼ばれている在来カブ1点、東通村・尻労（しっかり）海岸（3）で自生アブラナ1点の採種を行った。25日は風間浦町（4）、むつ市（5）、横浜町（6）、平内町（7）で自生カラシナ1点、ハマダイコン3点を収集した。26日は青森市内（8）で在来の‘筒井かぶ’、‘笹石（ざるいし）かぶ’、‘地たかな’を、弘前市内（9）のリンゴ園で60年以上昔より自生しているアブラナ1点を収集した。

尻労海岸近くのクキドウノ崎岸壁には自生アブラナの存在が確認されたことから、その調査を試みたが、渡船が必要とのことで収集を断念した。今回収集したアブラナは数個体の自生集団であり、クキドウノ崎集団との関連性は不明である。筒井かぶと笹石かぶについては、以前は地域の特産品である漬け物の材料として周辺地域でかなり栽培されていたが、最近では種苗会社育成品種に置き換わり、ほとんど栽培されなくなっていた。

3) 岩手県北沿岸地域 (11月26日－27日)

11月26日は山形村霜畑(しもはた)集落(10)で‘おちぼかぶ’と称される在来カブを収集した。このカブは根の肥大部が全面赤紫色に着色し、漬け物として食べる以外に葉を干し葉として味噌汁の具に利用するとのことであった。久慈市山根の端神(はしかみ)集落(11)ではルタバガ在来種の調査収集を行った。山根地区は、今日まで雑穀類を中心とした在来種が多く保存されていることで知られている。現地では在来種を‘仙台かぶ’と呼んでおり、根の地上部は紫紅色に着色する。10年以上前には山根地区や山形村等でも多く栽培されていたが、その後栽培されなくなり、現在では山根地区の1軒のみで栽培していた。用途は、「かぶけえ」と呼ばれる郷土食の食材に利用する。「かぶけえ」とはカブの入った粥のことで、‘仙台かぶ’をぶつ切りし、ゆでた後に荒く潰し、米・アワと共に粥にする。昔は凶作時の救荒食として、日常食としても数少ない甘みのある料理として食したそうである。また、粕づけ等の漬物用に利用している‘地たかな’の種子も収集した。‘地たかな’は、代々種子を切らさずに更新しているとのことであった。

27日は野田村(12)の米田(まいた)集落と日形井(ひかたい)集落で在来カブおよびルタバガ在来種の調査・収集を行った。在来カブは当地では‘ここかぶ’と呼ばれており、根は円錐型で白く、地上部は薄紫色に着色する。いずれも最近、近所の知り合いから種子を入手したとのことであった。米田集落のルタバガ在来種は‘砂糖かぶ’とよばれており、根の地上部は紫紅色に着色する。以前は周辺地域でも多く栽培していたが、その後作られなくなり、10年ほど前に種子を再導入したとのことであったが、その入手先は不明であった。用途は「かぶけえ」の材料に利用するが、現在では自家用に調理することはまれであり、昔の「かぶけえ」の味を懐かしんで寄り合い時の楽しみとして食べる程度とのことであった。日形井集落のルタバガ在来種は‘仙台かぶ’とよばれており、代々100年以上伝わっているとのことであった。根の地上部は淡緑色と薄紫紅色に着色する2タイプの分離が認められた。料理法としては、米田集落と同様に「かぶ会」と称する寄り合い時に、「かぶけえ」にして食べるそうである。また、昔は煮た後に焼いて食べたりもしたとのことであった。

4) 岩手県室根村 (12月17日)

室根村の矢越(やごし)地区(13)には、‘矢越かぶ’と呼ばれる在来のカブが2系統存在する。‘矢越かぶ’は昭和の初期には炊飯の増量材(かて飯)として、また甘味料として盛んに栽培されていたが、食生活の変化とともに全く栽培されなくなってしまった。しかし、保存種子の存在が明らかになり、平成6年に同村のオリジナル野菜として復活した。現在、‘矢越かぶ’を活用した村おこし事業が取り組まれており、特性を生かした加工や料理法の研究がなされ、古くからの食材を利用した新しい郷土食の誕生が注目されている。この‘矢越かぶ’の形態的特性はルタバガに類似しており、気仙地域で昔栽培されていた‘サツマカブ’と呼ばれたルタバガ在来種の可能性が示唆された。

5) 青森県南・岩手県北の北上山系周辺 (3月17日－18日)

3月17日は岩手県岩泉町(14)と種市町(15)で、18日は青森県三戸町(16)と新郷村(17)において在来種の調査・収集を行った。岩泉町安家(あつか)地区では在来ダイコン2系統と在来カブ1系統を収集した。ダイコンは安家に古くから伝わり、根の全面が赤または紫色に着色するもの

で、自家用のほかに町産業公社に出荷しているとのことであった。利用法としては凍（し）み大根や漬物、なますに利用するとのことであった。在来カブは当地で戦前から作られているもので、円錐形や丸型、全面薄紫、地上部のみ薄紫や全面白色等の様々な分離が見られた。肉質は堅いが甘みがあり、漬物や煮物、ご飯に混ぜて食べるとのことであった。種市町では在来カブを収集した。100年以上前から栽培されているとのことで、紫・紅・桃・白色が混ざっていた。甘みが強く、かぶ粥に利用するとのことであった。三戸町と新郷村では、それぞれ代々伝わるルタバガの在来種（‘仙台かぶ’とよばれている。）を収集した。三戸町のは根の地上部は淡緑色で、地下部はやや黄みがかかった白色である。茎部と根端を切り落として乾燥させた後、砂糖を入れて煮込み、間食として食べるとのことであった。また、新郷村では葉をつけたまま乾燥させて貯蔵し、砂糖を入れずに皮をつけたまま煮て、冷えてから間食として食べるとのことであった。

6）山形県小国町と福島県会津周辺（3月23日－26日）

3月24日は小国町(18)において通称‘ヒツェカブ’とよばれる自生カブを収集した。‘ヒツェ’とは「独りでに生えている」という意味で、以前は町の街道沿いにかんりの群落で自生していた。しかし、圃場の区画整理などのために現在ではほとんど見られないとのことであった。探索の結果、農家圃場に自生していた2株を収集した。

25日は金山町(19)で‘アザキ大根’の種子を入手した。‘アザキ大根’は当地に自生している野大根であり、根は繊維質で肥大しないが特有の辛みがソバの葉味に適していることから、金山町の特産品として栽培化を検討し、販売しているとのことであった。会津若松市(20)では菊池種苗から‘早生くきたち菜’と‘晩生ちりめんくきたち’および‘赤筋大根’を入手した。これらの品種は同店で選抜・採種している品種である。最近は大手種苗会社が育成した品種の人气が高く、これら地方品種の販売量は低減しているとのことであった。

4. 収集品の今後の措置

ナタネ・ルタバガ類については、東北農業試験場資源作物育種研究室において次年度以降に特性調査および増殖を行い、育種材料としての評価を行うとともにセンターバンクへ増殖種子を送付する。その他の植物については、収集種子を担当研究機関に移管する予定である。

5. 所感

今回の調査では、自生種を始め、事前調査でその存在が確認できたアブラナ科在来種や地方品種をほぼ収集することができた。岩手県室根村で分譲を受けた‘矢越かぶ’2系統は、その後のフローサイトメーターによるDNA量の測定からルタバガであると推定された。これにより、今回の収集活動によって、これまで全く保存されていない北上山系のルタバガ在来種8系統を収集することができた。日本でのルタバガ栽培は、一般的には明治時代に政府が外国より導入したのが始まりとされている。しかし、江戸時代末期には北海道で‘仙台蕪’の名で栽培されていたとの記録がある¹⁾。また、現在も在来種を栽培しているお年寄りが、その種は祖母の代から絶やさずに保存してきたものと話している。「かぶけえ」に代表されるルタバガを利用する食文化が成立し、今日まで大切に守

られていることを考えると、在来種は導入種とは異なり、相当古くから当地で栽培されてきた可能性がある。日本へのルタバガ伝来のルーツを探る上で興味深い事例である。

食生活の多様化が進み、多品目少量生産が求められる中、地域に伝わる在来種を有効利用し、新たな食材として加工販売する取り組みが広がっている。東北地方におけるアブラナ科在来種の活用では、岩手県遠野市に伝わる‘暮坪かぶ’が有名であるが、今回の調査でも地域興しの一環として、‘矢越かぶ’や‘安家大根’、‘アザキ大根’を特産作物として利用する試みがみられた。しかし、ルタバガを始め、今回収集した在来種のほとんどが家庭用栽培のみであり、栽培者はいずれも高齢で人数も限られている。このことから、さらなる調査・収集活動を早急にかつ継続的に実施する必要性を痛感した。

6. 謝辞

今回の収集に当たり、こころよく貴重な種子を分譲していただいた農家の方々、菊池種苗株式会社、情報やご協力を頂いた青森県畑作園芸試験場、大湯村役場・佐藤繁美氏、岩手県農産園芸課・茂市修平氏、岩手県千厩農業改良普及センター・中野武夫氏、テレビ岩手・遠藤隆氏、室根村・小岩邦彦氏、小国町農協、金山町活性化センター・青柳一二氏に深く謝意を表する。

7. 引用文献

- 1) 青葉 高 (1981) ルタバガ (スウェーデンカブ) の栽培地域, “野菜”. 法政大学出版局. 東京. 225—232.
- 2) 青葉 高 (1993) ツケナ, “日本の野菜”. 八坂書房. 東京. 152-160.
- 3) Gustafsson, M. and A. Falt (1986) Genetic studies on resistance to clubroot in *Brassica napus*. *Ann. Appl. Biol.* 108:409-415.
- 4) なにゃとやら編集委員会 (1983) “なにゃとやら—岩手県北地方の伝統食を探る”. 熊谷印刷出版部. 盛岡.
- 5) 農業生物資源研究所 (1990) “植物遺伝資源配布目録”. 農林水産省農業生物資源研究所.
- 6) 芹澤正和 (1989) ルタバガ, “野菜園芸大百科 14 特産野菜 70 種”. 農文協. 東京. 387-389.
- 7) 野菜試験場育種部 (1980) “野菜の地方品種”. 農林水産省野菜試験場.
- 8) 野菜試験場育種部 (1981) “野菜の保存品種”. 農林水産省野菜試験場.

Table1 Itinerary of the exploration and collection sites number
探索収集日程と収集地点番号

年	月	日	旅程と探索地点
'98	5.18		岩手県盛岡市 → 秋田県大湯村 (1)
	5.19		大湯村 → 盛岡市
	6.24		岩手県盛岡市 → 六戸町 (2) → 青森県東通村 (3) → 大間町
	6.25		大間町 → 風間浦町 (4) → むつ市 (5) → 横浜町 (6) → 平内町 (7) → 青森市
	6.26		青森市 (8) → 弘前市 (9) → 盛岡市
	11.26		岩手県盛岡市 → 山形村 (10) → 久慈市 (11)
	11.27		久慈市 → 野田村 (12) → 盛岡市
	12.17		岩手県盛岡市 → 室根村 (13) → 盛岡市
'99	3.17		岩手県盛岡市 → 岩泉町 (14) → 種市町 (15)
	3.18		種市町 → 青森県三戸町 (16) → 新郷村 (17) → 盛岡市
	3.23		岩手県盛岡市 → 山形県山形市 → 三川町
	3.24		三川町 → 小国町 (18) → 福島県会津坂下町
	3.25		会津坂下町 → 金山町 (19) → 会津若松市 (20) → 猪苗代町
	3.26		猪苗代町 → 盛岡市

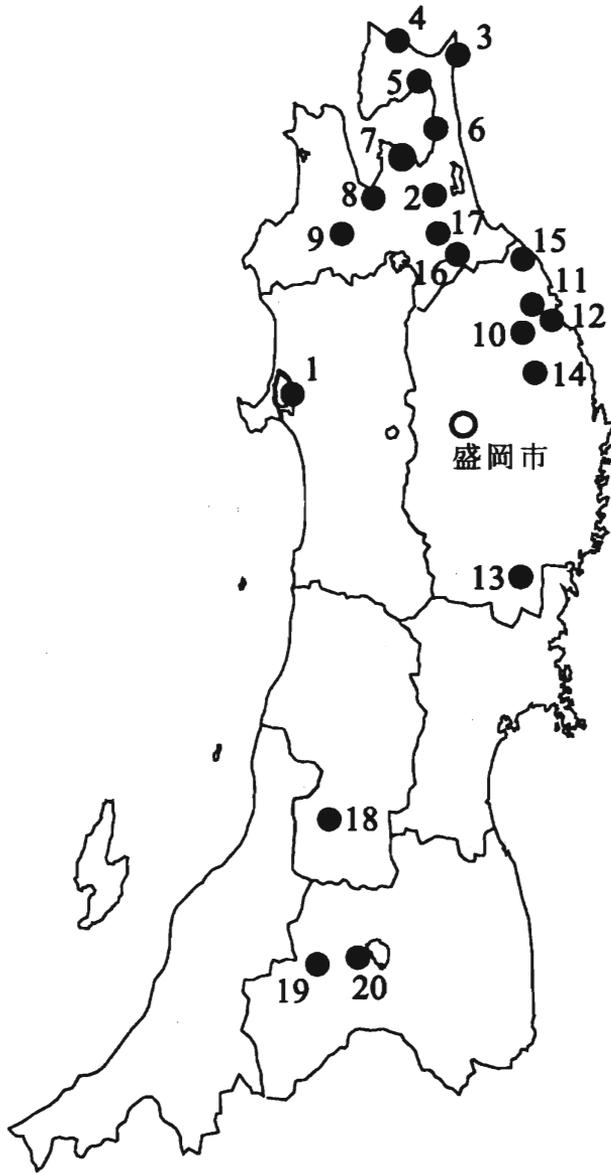


Fig.1 Collection sites (●) of Cruciferae germplasm in Tohoku Region.

Number on this map refers to Table 1.

東北地方でのアブラナ科遺伝資源の収集地点 (●)。

地図上の番号は Table 1 の番号と同一である。

Table 2 List of collected Cruciferae samples in Tohoku direct.
 東北地方におけるアブラナ科遺伝資源の収集リスト

No.	植物名	学名(種属名)	呼称	収集地*	作期
1	ナタネ	<i>Brassica napus</i>		青森県平内町清水川	
2	ツケナ	<i>Brassica napus</i>	晩生ちりめんくきたち	福島県会津若松市	10月中下旬播種、4月中旬収穫。
3	ルタバガ	<i>Brassica napus</i>	仙台かぶ	岩手県久慈市山根町端神	5月連休過ぎ播種、11月収穫。
4	"	(<i>napobrassica</i> group)	砂糖かぶ	岩手県野田村米田	8月上旬に播種、11月収穫。
5	"	"	仙台かぶ、カッパかぶ	岩手県野田村日形井	7月20日頃播種、11月収穫。
6	"	"	仙台かぶ、砂糖かぶ	岩手県野田村種綿	7月20日頃播種、11月収穫。
7	"	"	矢越かぶ(矢越系)	岩手県室根村矢越	7月末播種、11月上旬収穫。
8	"	"	矢越かぶ(大島系)	岩手県室根村矢越	7月末播種、11月上旬収穫。
9	"	"	砂糖かぶ	青森県三戸町	7月～盆前播種、11月収穫。
10	カブ	"	せんだいかぶ	青森県新郷村鹿田	盆頃に播種、11月中旬収穫。
11	"	<i>Brassica napus</i>	カブ	秋田県大潟村	
12	"	"	カブ	秋田県大潟村	
13	"	"	赤長水かぶ	青森県六戸町	8月中下旬播種、11月収穫。
14	"	"	筒井かぶ	青森県青森市大字筒井字八ツ橋	8月20日頃播種、11月収穫。
15	"	"	笹石かぶ	青森県青森市久栗坂浜田	8月20日頃播種、11月20日頃収穫。
16	"	"	おちぼかぶ	岩手県山形村霧畑、農家採種	8月中～9月上旬播種、10月末～11月上旬収穫。
17	"	"	ここかぶ	岩手県野田村米田、農家採種	
18	"	"	ここかぶ	岩手県野田村日形井、農家採種	
19	"	"	かぶ	岩手県岩泉町安家	
20	"	"	かぶ	岩手県種市町	7月末に播種、10月上旬以降収穫。

来歴及び特性
数株自生。
菊池種苗店採種・保存。導入時期は不明。福島や郡山ではちりめんかぶれ菜と呼称。くせは無く、葉や花茎、蕾をお浸し、つゆの実、油炒めに利用。
橋場 司(自家用)。10年ほど前まではよく栽培していたが、種子を絶やしたために3年前に再導入。根の地上部が紫紅色に着色するタイプで、甘みが強く、かぶ粥にして食する。
古館克子(自家用)。近所のおばあさん達が共同栽培しており、根の地上部が紫紅色に着色する。種子を絶やしたため、10年前に再導入。寄り合い時にかぶ粥にして食する。
林崎ヤス(自家用)。100年以上代々伝わる。甘みがあり、かぶ粥にして食する。昔は炊飯の増量剤として用いたほか、煮た後に焼いて食べたりもした。
下川タミ(自家用)。平成4年に林崎ヤスさんより種を導入。根の地上部が淡緑色紫紅色に着色するものにと分離。
小岩邦彦(自治会保存)。古くより矢越地区に伝わる。葉及び根でのアントシアンの着色が強い。村興し事業の一環として、加工法や調理法の研究が進められている。
小岩邦彦(自治会保存)。気仙沼市大島より導入。矢越系よりも葉及び根でのアントシアンの着色が薄く、大型になる。同様の利用法が開発されている。
米内口千恵(自家用)。代々伝わる。根の地上部は淡緑色で、地下部はやや黄みがかった白色。茎部と根端を切り落として乾燥させた後、砂糖を入れて煮込み、間食として食べる。
福山コメ(自家用)。葉をつけたまま乾燥させて貯蔵。砂糖を入れずに皮をつけたまま煮、冷えてから間食として食べる。
10年ほど前から点在して自生するようになった。長稈で根が円錐形に肥大し、繊維質で堅く、横しわが入る。
10年ほど前から点在して自生するようになった。短稈で根が円錐形に肥大し、繊維質で堅く、横しわが入る。
岩瀬利巳(自家用)。
川井清治(カブを出荷)。腰高の丸紅かぶで、昔は付近一体で多く栽培されていたが、現在では一軒のみ。形質保持のため、採種及び間引き時に留意。千枚漬けに利用。
白坂ミヤ(自家用)。円錐形の紅かぶで、筒井かぶよりも小型。以前は浅虫温泉の土産品として多く栽培・採種されていたが現在採種しているのは3軒のみ。千枚漬け、塩漬け、粕漬けに利用。
鹿糠マリ子(自家用)。全面紅紫色の長かぶで、代々種子を絶やさずに栽培している。漬け物や酢漬けの他に、葉が柔らかく美味しいので、干し菜として貯蔵して汁の具に利用。
古館克子(自家用)。近所のおばあさんが栽培しており、知り合いから種子を入手。根は円錐形で白く、地上部が鉢巻き状に薄紫色に着色する。
林崎ヤス(自家用)。沿岸部の知り合いから種子を入手。根は円錐形で白いが、地上部が鉢巻き状に薄紫色に着色する。
小野寺長十郎(自家用)。当地で戦前から作られており、2年前に再導入。円錐形、丸型、全面薄紫、地上部のみ薄紫、全面白色等の分離が見られる。肉質は堅いが甘みがあり、漬け物や煮物、ご飯に混ぜて食べる。
下町ノブ(自家用)。100年以上前から栽培しており、紫・紅・桃・白色が混ざる。甘みが強く、かぶ粥に利用。

Table 2 List of collected *Cruciferae* samples in Tohoku direct (cont).
 東北地方におけるアブラナ科遺伝資源の収集リスト (続き)

No.	植物名	学名(種属名)	呼称	収集地*	作期
21	カブ	<i>Brassica rapa</i>	水かぶ、赤長かぶ	青森県三戸町(市日)	盆頃に播種、11月収穫。
22	"	"	ヒッチェかぶ	山形県小国町	
23	アブラナ	<i>Brassica rapa</i>		青森県、東通村、尻劣(しっかり)海岸	
24	"	"	青菜	青森県弘前市石川	
25	ツケナ	<i>Brassica rapa</i>	早生きたち菜	福島県会津若松市	10月中下旬播種、3月下～4月上旬収穫。
26	カラシナ	<i>Brassica juncea</i>		青森県、平内町清水川	
27	"	"	地たかな	青森県青森市雲谷	9月播種、10月末～11月収穫。
28	"	"	地たかな	岩手県久慈市山根町端神	
29	ダイコン	<i>Raphanus sativus</i>	安家大根	岩手県岩泉町安家	7月～盆前播種、11月収穫。
30	"	"	安家大根	岩手県岩泉町安家	7月末播種、10月中旬以降収穫。
31	"	"	アザキ大根	福島県金山町	6月末～8月中旬播種、積雪するまで適時収穫。
32	"	"	赤筋大根	福島県会津若松市	
33	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus</i>		青森県風間浦町蛇浦	
34	"	"		青森県むつ市浜奥内	
35	"	"		青森県横浜町	

来歴及び特性
平船富太郎(一戸町種苗商)。紅色の蕪で、50年以上昔から採種・選抜、漬け物に利用。
伊東吉美(畑に自然発生)。10年ほど前は付近一帯の畑に自然発生していたが、現在ではほとんど見られない。葉には毛が見られ、根は白色で赤筋が入るものもある。「ヒツチェ」とは独りでに生えるの意。
数株自生。近隣のクキドウノ崎にはアブラナの自生群落があり。
工藤良子(リンゴ園内に下草として自然発生)。来歴は不明であるが、開園時の50年以上昔からみられる。春先に青菜として利用。苦みがあるが、ゆでた後に一晩水につけることで苦みはとれる。
菊池種苗店採種・保存。他での採種は無し。小松菜より早生で多収であるが、くせ(苦み)が有り。30年程前に在来種(荒木田種)より選抜。葉や花茎、蕾をお浸し、つゆの実、油炒めに利用。
群落で自生。
川越カス(市内種子店から委託採種)。約20年前から採種。漬け物用として利用。
橋場 司(自家用)。糠漬け、粕漬けに利用。
小野寺長十郎(自家用・公社に出荷)。安家に古くから伝わり、全面赤・紫色に着色。凍み大根、漬け物、なますに利用。
大崎永二郎(自家用)。全面赤色に着色。凍み大根、漬け物、大根下ろし、なますに利用。
沼沢湖周辺に自生。根は白く繊維質で肥大せず、15cm程度。草型や花色等に多様な変異が存在。特有の辛みがあることからまで適時収穫。、ソバの薬味として栽培・販売されている。
群落で自生。
群落で自生。
群落で自生。
群落で自生。